

マヤ地域における「パトリ」の文化資源化

金沢大学大学院 博士後期課程

五木田 まきは

はじめに

「パトリ」はメソアメリカのゲームの一種であり、古代の建造物にも古代のパトリのボードを示したものと考えられているグラフィティが残っている。こうしたパトリグラフィティは、テオティワカンやアステカ同様に、マヤ地域のほぼ全域から出土している。こうした考古学資料に加え、植民地時代前後のエスノヒストリーの記述や現代マヤ民族の民族調査にも、パトリと呼ばれる図像や類似の慣習が記されている。このように広域・長期にわたり資料が存在するが、パトリ研究は初期段階に留まっている。そのため、近年重視されている保存と活用の視点を持った研究はなく、パトリの保存状況に関する報告もない。また、先行研究に含まれていない新たな出土例も報告されている。本発表では、マヤ地域のパトリグラフィティを資料とし、パトリの保存と活用の現状と課題を分析し、文化資源としてのパトリの重要性及び活用可能性、そして活用のあり方を考察する。

1. 研究の背景と目的

パトリ研究は1879年のE. B. Tylorに始まり、その機能や使用法についてはエスノヒストリーや民族誌の分析を中心に解釈が進められてきた。また、各地の遺跡でも20世紀初頭からパトリグラフィティの出土が報告されている。しかし、これらのほとんどは発掘報告書におけるパトリと思しきグラフィティを発見したという単純な記録、或いは他の遺跡での類似例を挙げる程度の分析にとどまっており、マヤ地域全体のパトリを包括的に考察したものにはなっていない。近年重要視されてきている保存と活用に関する視点を持った研究が殆どない。包括的なパトリの考古学資料をまとめた研究も1994年のGallegos Gomora以降は積極的にされていない。

本研究は、こうしたパトリの保存と活用における現状を調査し、その課題を分析する。そしてパトリグラフィティを文化資源として捉えた際どのような活用が可能であるか考察し、最終的に具体的な活用案を提示することを目的とする。

2. 16世紀以降の時代におけるパトリ

元来パトリとはナワトル語で「豆」を意味する単語である。植民地時代前後の先住民によって描かれた絵文書や宣教師によって記された記録にも、同じくパトリと呼ばれる図像や慣習が記されている。アステカの絵文書に最もよく記録されており、ショチケツアルという女神と共に描かれることが多い。1552年のFrancisco de Gomaraを最初に、スペイン人たちが記した記録書のなかにもゲームに関する記述が複数確認できる。

20世紀初頭に入ると、現代マヤ民族やメキシコの先住民の集落で調査をした人類学者たちにより、似たようなゲームが記録されている。先住民たちがバックギャモンに似たゲームを行っていることが記述されている。

3. 先スペイン期におけるパトリ

複数のマヤ遺跡の建造物に刻まれたグラフィティのなかに、パトリと呼ばれる図像がある。多くは内部に十字を持ち、マス目で区切られた、方形や円形の幾何学模様である。このパトリグラフィティはマヤ南東部から北部までマヤ地域の広い範囲に分布している。先行研究及び各遺跡の発掘調査報告書などから抽出を行った結果、先行研究に含まれていない近年のデータを含めてマヤ地域で報告されているものだけで、21遺跡63のパトリのグラフィティを確認した。

この63のパトリグラフィティに関して、年代・出土地域・形状・出土建造物の性質・出土位置について分析を行い、パトリは古典期前期にマヤ南東部のコパンを最古のものとし、その後古典期後期にペテン地方を中心とする南部低地に広がり最盛期となり、古典期終末期には北部低地にも定着し、後古典期に至るまで行われていたことを示した。また、パトリグラフィティは、その7割がアクロポリスや宮殿など王家に関わる地域、神殿など儀礼的建造物、エリートたちの居住区から出土し、市場や門など公共建造物、モニュメントなど点数は少ないものの様々な場所から見つかっていることを明らかにした。

これまで言われて来たように、暦や占いに関連する儀礼的な用途だけであればこれほど多様な場所に刻まれることは考えにくく、スペイン人の記述のように単純な暇つぶしであれば、政治の中心地であるアクロポリスや神聖な神殿で行われるとも考えにくい。多様な性質の建造物から出土例があるということは、パトリが特定のグループの特定の用途の為だけに行われていたのではない可能性を指摘することができるだろう。

4. 遺跡におけるパトリの保存

グアテマラではティカル、ナクム、ワシヤクトゥンの3つ、ホンジュラスではコパンとエル・プエンテの2つの遺跡の計5つの遺跡に赴き、過去の発掘報告書に記載された20のパトリの現状確認を行った。調査の結果、訪問した5つの遺跡・20のパトリのうち9割が確認できない状況になっている。同じ遺跡や同じ建造物でも位置により状況は異なることも多い一方で、異なる遺跡や建造物でも類似の状況が見られることもあった。こうした遺跡におけるパトリ保存の状況は、浸食、被覆、上書き、埋め戻し、除去、破砕の6つに分類できる。またこうした状況の原因として、遺跡管理の不整備、保護意識の低さ、価値付けの低さが挙げられる。

これらの原因を引き起こした根本的な問題は認知度の低さであると考えられる。考古学者と博物館・文化財関係者を対象に行ったアンケートと博物館展示に関する調査では、パトリを博物館展示として活用している事例が1つも確認できなかった。このような遺跡や博物館

といった公開の現場において、パトリが全く活用されていないことが、認知度の低さの証拠であり原因といえる。パトリの認知度を向上する為に、パトリを活用した展示が求められる。

5. まとめ：文化資源としてのパトリの活用

パトリは様々な学術分野・観点から多様な価値や今日的意義を見出すことのできる資料である。長期にわたり関連する様々な事例報告があり、古代マヤ社会だけでなく、現代の先住民文化を理解するメディアとなる資料と言える。学術的にもパトリは解明すべき未確認の要素があり、さらにはそれによって古代マヤ文化や社会への新たな理解を促進する可能性を秘めた資料である。こうした多様な価値があるにも関わらず、専門家の間でさえも認知度が低く、積極的な保存が行われていないため消失の危機に瀕している資料でもある。

こうした状況を改善し、パトリを活用する一つの方策として、博物館におけるパトリボードのレプリカを用いた体験型のハンズオン展示案を提示する。ゲーム性を有するパトリはインタラクティブな展示が求められている昨今の博物館において、ハンズオン展示を可能とする貴重な存在である。博物館は研究施設であると同時に重要な社会教育の場である。つまり、博物館で展示をするということは、展示を作成する学芸員や研究者などの専門家による研究を促進すると共に、来館者を通じて社会全体へ研究成果やメッセージを発信することのできるメディアとなり、同時に専門家と社会両者へのアプローチが期待できる。ここでは、ホンジュラス共和国コパン・ルイナス市に建設中のコパン・デジタル・ミュージアムを活用の対象と設定し、当該博物館の企画展示室における企画展としての展示案を提示する。

パトリはグラフィティとしての考古学的資料としての価値だけでなく、文化財保護意識の問題やマイノリティ文化の理解といった現代社会との関わりにおいても評価することのできる資料である。パトリを考古学資料として研究するだけでなく、博物館資料として展示するだけでなく、博物館という情報発信の場を通じての問題提起や文化理解など多様なアプローチでの利用法を提供することが、パトリを文化資源として活用する 1 つの方策であるといえよう。

主要参考文献

- Gallegos Gomora, Miriam Judith (1994) “Un patolli prehispánico en Calakmul, Campeche” *Revista Española de Antropología Americana*, 24, pp.9-24
- Swezey, William R., Bittman, Bente (1983) “El rectangulo de Cintas y el patolli: nueva evidencia de la antigüedad, distribución, variedad y formas de practicar este juego precolombino” *Mesoamerica* 6, pp.373-416
- Verbeeck, Lieve (1998) “Bul: A Patolli Game in Maya Lowland” *Board Game Studies*, 1, pp.82-100

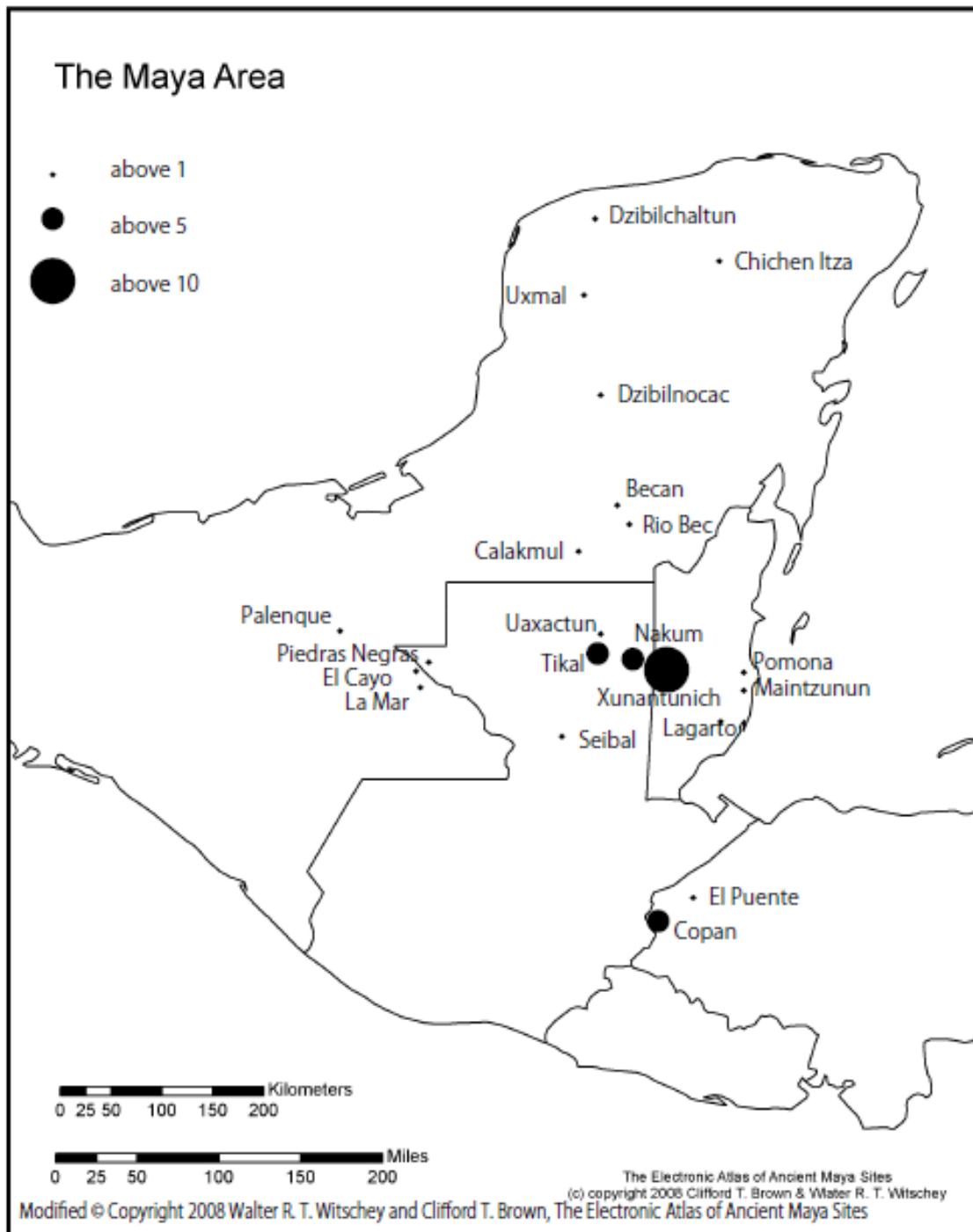


図1 パトリグラフィティの出土遺跡

「マヤ地域南東部における黒曜石交易—蛍光 X 線分析による原産地推定」

金沢大学 人間社会環境研究科博士後期課程

福井理恵

*本研究発表は、金沢大学において行われている蛍光 X 線分析を用いたマヤ文明における黒曜石の原産地推定、および黒曜石の流通と政治的関係に関する共同研究の成果の一部である。

はじめに

マヤ文明では金属器をほぼ使用しなかったために、石器が日常の利器、武器、儀礼の道具といった様々な場面で重要な役割を果たしていた。黒曜石は火山によって生成されるため原産地が限定されているという特徴を持つ。マヤ地域では、グアテマラ南部からホンジュラス西部にかけて主要な黒曜石原産地が分布している。原産地が限られているにも関わらず黒曜石製石器がマヤ地域全域から出土していることから、黒曜石は長距離交易品として広く交易されていたと考えられている。先行研究においては、特にカミナルフユやコパンといった黒曜石原産地に比較的近い大都市は黒曜石の流通を統御していたとして、黒曜石は政治的にも大きな役割を果たしたとされている (Aoyama 1999, Brown et al. 2004 など)。

黒曜石は構成するマグマの組成や生成過程の違いから各原産地で異なる特徴を有する。このため原産地推定では黒曜石製石器を各々の原産地の特徴と比較することで、遺物の原産地が明らかになる。先行研究では、肉眼による原産地推定が行われ、その結果に基づく研究が主流であったが、本研究では、**蛍光 X 線分析を使った原産地推定を行い、その結果から黒曜石の流通と政治的関係を考察するアプローチをとる**。この点が先行研究と大きく異なる点である。肉眼分析は迅速かつ安価であるという利点を持つが、**分析者の能力や経験のみに依拠しているため、主観的で反証性に欠けるという欠点を持つ**。蛍光 X 線分析は**非破壊**で分析できる理化学分析であり、中性子放射化分析などの他の理化学分析よりも扱いやすく比較的**分析時間も短時間で済む**。従来の蛍光 X 線分析を含めた理化学分析では、分析費用や分析時間の長さなどのために分析点数が少なく、数千点の遺物のうち数十点を分析し、その遺跡での黒曜石交易を論述するという点が欠点として挙げられていた。本研究では、この欠点を克服するべく、**統計的に有意な点数を確保することに努めた**。

ラ・エントラーダ地域と黒曜石交易

本研究の対象地域であるラ・エントラーダ地域はマヤ地域南東部、ホンジュラス西部に位置している (図 1)。1984 年より日本の国際協力事業団 (現・国際協力機構) 青年海外協力隊事務局とホンジュラス国立人類学歴史学研究所 (IHAN) が合同で中村誠一氏 (現・金沢大教授) をディレクターとしてラ・エントラーダ考古学プロジェクトを実施し、本格的に調査された地域である。この調査成果や出土遺物や建造物の空間配置及び構造といった

特徴から、当該地域はマヤ低地の特徴を有する遺跡、モタグア川下流域の特徴を有する遺跡、マヤ低地とモタグア川下流域の、またはマヤ低地と西部キミスタンの、中間折衷型の特徴を有する遺跡、に分類できる (Nakamura, et.al eds. 1991, Nakamura1992)。

古典期後期 (後 700 年–900 年) に最も発展したこの地域では、マヤ低地の特徴を有する遺跡が占める範囲が大きい。それらの遺跡はマヤ地域南東部最大級の都市であるコパンの影響を色濃く受けている。それは黒曜石交易にも及び、コパンが古典期に統御していたと言われるグアテマラのイシュテペケ産黒曜石が当該地域から出土する黒曜石の大部分を占めるということが先行研究から述べられている。一方、同じ先行研究の中で、ラ・エントラーダ地域の中でもコパンから地理的に最も遠い最北部の遺跡の一部ではホンジュラスのサン・ルイス産黒曜石がイシュテペケ産黒曜石の出土を上回っている。従って、黒曜石交易においてコパンと密接な関係を保っていた遺跡ではイシュテペケ産黒曜石が多く搬入され、イシュテペケ産黒曜石の減少するコパンの黒曜石交易圏の周縁部では、代わりにサン・ルイス産やその他の原産地の黒曜石を利用してたとされている (青山 1993、Aoyama1994 など)。

そこで本研究では、**原産地別の黒曜石の分布圏と政治的関係**に関して、また、**イシュテペケ産黒曜石のコパンによる統御の規模や実態**を明らかにしていくことを目標として、まず蛍光 X 線分析により、ラ・エントラーダ地域出土の黒曜石の原産地推定を行う。

調査・分析法

原産地推定をする際にはまず各原産地の特徴を予め把握している必要がある。先行研究の中で、肉眼的および理化学的な各特徴に関して記述がある場合もあるが、**原産地のどこから採取した原石を基にしているか**といったような詳細な情報は明らかにされていないことが多い。ところが、**同定されている一つの原産地の中には複数の産出地点が存在する**。従って、本研究では、独自の原石データを取得するために原産地を踏査し、試料採取を行った。対象としたのはグアテマラのエル・チャヤル、サン・マルティン・ヒロテペケ、イシュテペケ、ホンジュラスのラ・エスペランサ、サン・ルイスの 5 ヶ所である。**各原産地内での多様性を考慮し、それぞれ 2 つ以上の産出地点で採取を行った** (福井 2015)。

原産地推定の分析方法としては、理化学分析の中でも蛍光 X 線分析を採用した。装置は金沢大学自然科学研究科鉱物・結晶学研究室が所有している**波長分散型蛍光 X 線分析装置 Rigaku ZSX Primus II**を使用した (図 2、図 3)。初めに採取した原石サンプルを分析装置にかけ、各原産地の化学元素の特徴を明らかにし、その後ラ・エントラーダ地域出土の遺物を分析装置にかけ、含まれている化学元素の違いを比較する。遺物はラ・エントラーダ地域の 34 遺跡および隣接するキミスタン谷西部のアサクアルパ遺跡における発掘調査で出土した**合計 960 点** (内訳 ; ラ・エントラーダ地域の 34 遺跡から 928 点、アサクアルパ遺跡から 32 点) を分析した (2015 年 5 月末現在)。分析装置に非破壊でかけられる大きさの都合上、直径 4.5cm 以上の遺物は除外した。**遺物は測定前に器種、長さ、幅、厚さ、重さ、肉**

眼での原産地推定、肉眼による黒曜石の特徴を記録し、測定を行った。測定元素はマグネシウム(Mg)、ケイ素(Si)、塩素(Cl)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の12元素で、一点につき約8分間測定した。原石サンプルと遺物の比較にはルビジウム、ストロンチウム、ジルコニウムの3元素の比を使用した。

分析結果と今後の展望

蛍光X線分析による原産地推定から、ラ・エントラダ地域出土の928点中、最も点数が多かったのはイシュテペケ産黒曜石であった。その次にサン・ルイスが続き、次に続くのが採取原石の化学組成とは一致しないと考えられる原産地不明の黒曜石である。それらが大部分を占め、エル・チャヤル、サン・マルティン・ヒロテペケ、ラ・エスペランサに関してはごく僅かしか確認できなかった。一方、アサクアルパ出土の32点中では、イシュテペケ産黒曜石が30点、原産地不明が2点であった。アサクアルパのイシュテペケ産黒曜石30点中、プリズマティック・ブレードが24点(80%)であった(Nakamura and Fukui2015)。

ここでまず、先行研究と同じ方法で、ラ・エントラダ地域の各遺跡別に注目する。102点の遺物を分析したCP-PLE50(Los Higos)(図4)は、ラ・エントラダ地域の中でもカテゴリー5の最大規模で、かつ様々な遺物からコパンと密接な関係を築いていたと考えられている。しかし、コパンの影響が拡大する古典期中期から後期にかけて(後400年-900年)の層位から出土した遺物でも、イシュテペケ産は43点(55%)、サン・ルイス産は22点(28%)、原産地不明が10点(13%)、エル・チャヤル産が3点(4%)となっている。ラ・エントラダ地域全体を見ると、分析した黒曜石のうちイシュテペケ産黒曜石の割合が100%に近いという遺跡が多い中で、この遺跡はイシュテペケ産黒曜石が比較的低い数値を示している。イシュテペケ産黒曜石のうち35点(43点中81%)がプリズマティック・ブレードである。

上記の分析結果は、ラ・エントラダ地域で最も低地マヤ的な遺跡の一つでありコパンの2次センターの代表格であるロス・イゴスにおいてこれまでの肉眼分析による原産地推定に基づく研究では明らかにされなかった産地比率を示している。一方で黒曜石以外ではコパンとの交流を示唆するものは少ない遺跡で、黒曜石はイシュテペケ産黒曜石が大部分を占めている事例もある。また、マヤ低地とは異なる文化パターンを持つキミスタン谷の遺跡でも高い割合でイシュテペケ産黒曜石が見られている。本研究のこれまでの分析結果は、南東マヤ地域の黒曜石の流通が従来考えられていたよりもはるかに複雑であるということを示している。金沢大学における共同研究では、今後、こういった石器の単純な産地比率だけに着目するのではなく、先行研究が見落としがちであった各石器の器種の詳細を再度、分析・検討することで、それぞれの石器器種が各遺跡で持っていた重要性を考慮したうえで原産地別の黒曜石の分布圏の同定を行い、南東マヤ地域におけるセンター間の政治的な関係を追及して行く計画である。

<引用・参考文献>

青山和夫

1993 「東南マヤ低地のクロスロードにおける打製石器の生産・流通システム」
『考古学研究』40(3):103-121。

福井理恵

2015 「マヤ地域における黒曜石の原産地踏査」古代アメリカ学会会報第38号、寄稿。

Aoyama, Kazuo

1994 Socioeconomic Implications of Chipped Stone from the La Entrada Region, Western Honduras. *Journal of Field Archaeology*, 21 (2): 133-145.

1999 *Ancient Maya State, Urbanism, Exchange, and Craft Specialization: Chipped Stone Evidence of the Copan valley and the La Entrada Region, Honduras*. University of Pittsburgh Memoirs in Latin American Archaeology No.12. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.

Brown David O., Meredith L.Dreiss, and Richard E. Hughes

2004 Preclassic Obsidian Procurement and Utilization at the Maya site of Colha, Belize. *Latin American Antiquity*, 15(2):222-240.

Nakamura, Seiichi

1992 Frontera Prehispánica en la Encrucijada del Sureste Maya. *Annals of Latin American Studies*, 12:131-167.

Nakamura, Seiichi, and Rie Fukui

2015 *Los Resultados del análisis de los artefactos de obsidiana provenientes del sitio arqueológico Azacualpa, Santa Bárbara, mediante la fluorescencia de rayos X*. Informe presentado al Instituto Hondureño de Antropología e Historia

Nakamura, Seiichi, Kazuo Aoyama, Eiji Uratsuji, eds.

1991 *INVESTIGACIONES ARQUEOLOGICAS EN LA REGION DE LA ENTRADA TOMO I*, San Pedro Sula: Instituto Hondureño de Antropología e Historia.

<図表>

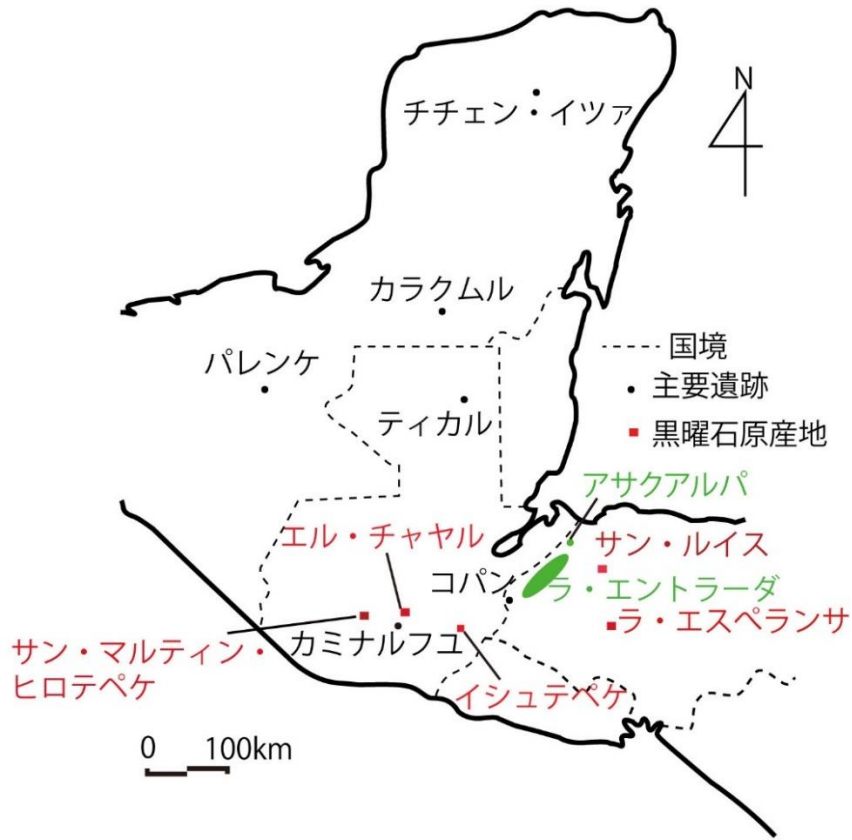


図1 ラ・エントラーダ地域と原産地踏査地



図2 蛍光 X 線分析装置

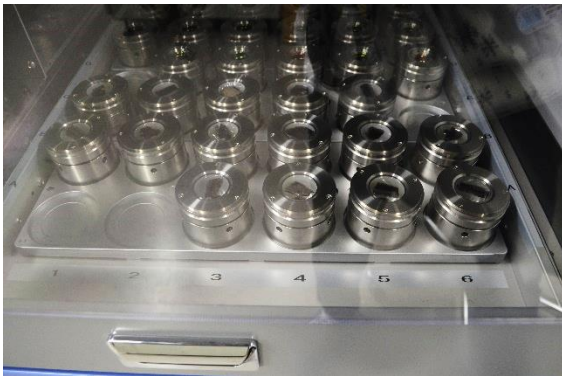


図3 装置内部試料室

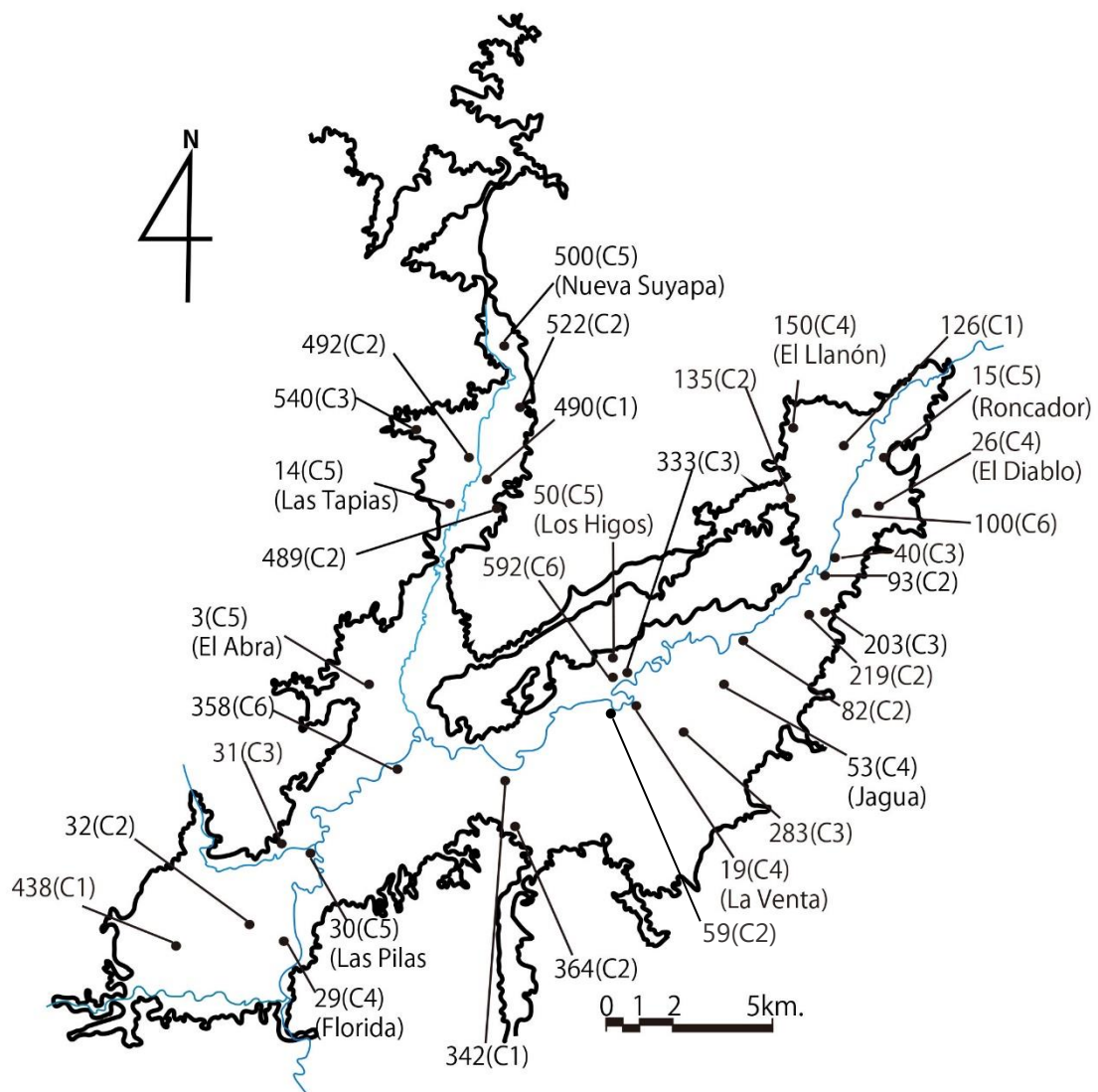


図4 ラ・エントラダ地域、分析を行った遺跡